

廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明…………… 1
 東京大学理学部は我が国と人類の柱に
 …飯田修一… 2
 飯田先生の御退官によせて…………… 上村 洸… 3
 東大理学部を離れるにあたっての御挨拶
 …藤井忠男… 4
 藤井忠男先生の転任にあたって…釜江常好… 5
 愚生の夢……………橋本英典… 6
 橋本先生を送るに当って……………神部 勉… 8
 論理の飛躍……………岡村孝郎… 8
 岡林さんのこと……………和田 靖… 9
 宇宙の易学39年……………海野和三郎… 10
 海野先生を送る……………尾崎洋二… 12
 去るにあたり……………不破敬一郎… 13

不破先生夏話一人魂の分光学……………原口紘丞… 14
 三崎からのねがい……………木下清一郎… 15
 木下清一郎先生……………重井陸夫… 16
 東大を去るにあたって……………桐村康子… 18
 桐村さんを送る……………藤田昌子… 19
 “弥生ヶ原にたゞずみて”……………友田幸子… 20
 友田技官を送る……………熊沢峰夫… 21
 仲野喜美子さんを送る……………佐藤良輔… 22
 今井 勲さん……………近藤 保… 23
 植物園の35年……………大塚靖夫… 24
 大塚靖夫(植物園)の退官によせて…甲斐正人… 24
 石渡丈夫さん……………橋本勝眞… 25
 <<学部消息>>…………… 26

表紙の説明

赤道上を動く大積雲団

惑星探査機ボイジャーから送られて来る映像は、遠く離れた惑星の知られなかった姿を映し出し、多くの謎を問いかけて来るが、よく知っているつもりが地球の気にも、人工衛星から眺めて初めてわかった不思議な現象がある。

3枚の写真は、気象衛星「ひまわり」から見た雲の姿で、左から順に1985年4月16日、18日、20日のものである。図中央を東西によぎる赤道に沿って、対流性の積雲が多発しているが、よく見ると、東西に3,000 km程度のひろがりを持った積雲の塊がある(矢印)。一連の写真が示すように、この積雲集団は赤道沿いに西から東へ動いて行く。赤道近くでは、東風(西向き)の貿易風が吹いているから、積雲集団は風に流されているのではなく、それに逆らって動いている。赤道沿いに東向きに伝わる大規模な大気の波・赤道ケルビン波が関係しているらしい。積雲集団として活発なのはインド洋から西太平洋までだが、波動は地球を一周し、40~50日の周期を持つ。この“振動”は、夏季インドのモンスーンの降雨をはじめ、熱帯域全体の気象、さらに梅雨活動の変動とか寒気の吹き出しのような中・高緯度の気象の長期変動にも影響を与えるらしい。

地球物理学教室の気象研究室では、全域を海で覆われた「水惑星」の数値モデルを作ってシミュレーションを行い、世界の先頭に立って、この現象のメカニズムを明らかにしつつある。

地球物理学教室 松野太郎

東京大学理学部は我が国と人類の柱に

飯田修一（物理学教室）

昭和19年10月東京帝国大学として入学以来、40年余に亘って在籍した物理学教室を去る時期が近づきました。私共は東京大学の中で、空襲、終戦、米軍進駐、復興、大学紛争、経済発展を経験した世代です。更に東京大学改革資料室長、理学部教務委員長、物理学教室および理学部の百年史編集の責任者などを勤めさせて載き、教育と研究に関して、物理学教室、理学部、我が国、更に世界の動きを、より適確に理解する立場に立ったように思います。こうした観点で、物理学教室、理学部、我が国、更に世界が、今新しい歴史の節目に差し掛って居るように感じて居ります。

物理学教室では、22講座（+2施設？）の大世帯の為に、教室主任の負担は非常なものとなり、“Good old days were over.” といっってよい状況が出現しています。人事などの結論を得るのに大変困難な場合があり、教室構成員の都合を合せるのに、二ヶ月の単位は普通となり、2ヶ月×15=2.5年の教育・研究上の空白が、教室構成員の誰もが希望しないのに、結果として発生し得る状況を実感して居ります。

私はスピンの魅かれて茅誠司先生に師事し、Ni₃Fe規則格子、フェライト、マグネタイトなどを、関沢、相山、井上、田崎、近君など、多くの大学院学生諸君、助手諸君の協力のもとに実験研究し、成果は円滑に公表されました。ところが、1974年、電子を半径

$$R = 2 \left(1 + \frac{\alpha}{2\pi} \right) \frac{\hbar}{mc} \sim 0.0077 \text{ \AA}$$

の永久電流環と見る電子の永久電流モデルが発見され、このVRモデル（Vortex Ring）を基礎として、矛盾のない古典物理学体系が完結し、

更にこのc-数体系（c: classical, 普通の代数方程式）を、略々周知の変換方法で、q-数体系（q: quantal, オペレーター式のこと）に変換し、それらが掛る状態関数（シュレディンガーの波動関数 $\phi(\mathbf{r}, t)$ など）を加えて、物性物理学に十分な精度を持つ量子物理学体系に移行する新体系物理学が建設されました。この新物理学の創始、整理、発展の過程で、常識を破るタイプの新学説論文の公表阻止問題という予期しない困難に直面し、未だに全面解決とは言えぬ状況があります。

今丁度フィリピンで、アキノ派の何名かが殺害され、アキノ夫人への直接的な暗殺の脅しが掛るなど、その大統領選挙の不正振りりが報道されて居ります。我が国の場合、選挙に関してこの種の後進国性は少ないと思われます。しかし、ことが巨大な予算や研究費、重要な人事、更に筆者の直面しているような常識を崩す、従って既存の権威の一部を損う恐れのある論文の公表などに関して、その内容の本質に於て同等的な、不正な活動、努力が、明瞭に現存するように理解します。

これらの組織的努力はあながち非難されるべきもの許してないという論理があります。一つは大善小悪として止むを得ぬという考え、又、もし、こうしたことのない世界に我が国があった場合、それらのタクティクスを周知の新勢力の侵入に対して全く無防備となり、例えば西欧文明との接触に際して、相手方の術中に陥入り、植民地化したであろうという推定であり、何れも真理の一面があります。

しかし一方に於て、例えば創造的研究の振興を表明している国民と科学者の総意には逆符号

となります。又、こうした不公正な活動は、外国人の国内活動に対して特に効果的に働きますから、国際信用の向上には逆行するでしょう。

百年史を調べると、昭和の始めから太平洋戦争の勃発に至る理学部と東京大学の動きが、刻銘に判ります。われわれの先輩も、破局に向って進む我が国の姿を感知し、さゝやかな抵抗を試みた状況も見られます。しかしある段階を過ぎた上では、蟻螂の斧となって了ったようです。それで僭越を承知の上で、こゝで二つの事を述べたいと思います。一つは物理学教室自体、理学部自体、更に東京大学自体が、good old daysでなくなり、上記のようなtacticsによってその進路が定まる危険性です。今一つは、我が国の研究

教育体制に関する事で、共同研究所、共同研究機構などを含む有形・無形の多様な組織が対象になります。例えば上記の新学説に対する抵抗の動きに、これら組織のいくつかが、関係したという推定が成立します。従って懸念は、これら横の連絡組織が、巨額の研究費や、重要事項が関係する場合に、目的を遂げるためには手段を選ばぬという方向を選択し、嘗て軍部が過った如く、科学者の組織が、国の進路を過まらせないだろうかという可能性の懸念であります。

退官に当たっての言葉として、不相応しくないかも知れませんが、現在最も大事に考えている事として、この文章が理学部広報に記録されることを光栄に思います。

飯田先生の御退官によせて

上 村 洸 (物理学教室)

飯田修一先生は、本年3月停年退官されることになりました。先生は昭和22年9月東京帝国大学理学部物理学科を御卒業になり、引続き大学院生、理学部助手として茅誠司先生の下で研究を続けられました。昭和33年に理学部助教授、昭和43年には教授になられ、その後今日まで、学部学生時代から通算しますと42年の長期にわたり、理学部物理学教室で一貫して研究生活を過ぎてこられました。

私が飯田先生と近付きになったのは、私が学部3年の時、強磁性体の磁区の観察に関するミニ実験を五月祭で行うために茅研究室に弟子入りをした時でした。飯田先生は丁度助手になられた頃で大変張切っておられ、夜遅くまで磁区を実際にみるための know-how を親切に教えて頂いたことを今でもよく覚えております。その後私が米国ニュージャージー州マレーヒルにあるベル電話研究所(現在のAT&Tベル研究

所)に勤めております時に飯田先生御一家もベルに来られ、一年半程御一緒にベル研で研究をし、当時の日本の物理の研究水準をどうやって米国の水準にまであげられるかについてよく議論を致しました。

その当時、飯田先生は酸化物磁性体の研究に関心をもち、ユニークな洞察力で優れたアイデアを出されて活発に研究を進めておられました。私もコバルト・フェライトのNMRの研究で先生と御一緒に仕事をしましたが、その旺盛な好奇心とユニークなアイデアには、多少辟易する時もありましたが、大いに感銘を受けました。

飯田先生は、既成の考え方にとらわれない大変ユニークな発想をされますが、理学部教務委員長の時に、理学部のすべての講義に番号をつけ、すべての学科の午前の講義時間を10時15分に揃えた時間割を編成して、学部学生が他学科

の講義を聴講し易いように便宜をはかったことなども、ユニークさの現れと云えましょう。最近飯田研究室と一緒に討論する機会もなく研究室の様子はよく分かりませんが、嘗ての飯田研究室はさむらいも多く、談論風発の気風に溢れ、その意味で大変ユニークでありました。現在多くの飯田研出身者が物性物理の分野をはじめ広く学界で活躍しておられるのも、先生の教育熱心と飯田研のユニークな雰囲気にも負っているの

ではないでしょうか。

飯田先生は現在研究以外に東大百年史の編集に理学部編集委員長として参画され、この面でも御活躍になっておられます。間もなく完成の予定と伺っていますが、大変骨の折れる仕事で本当に御苦勞様でした。停年後も御健康に注意されて御活躍下さいますようお願い申し上げます。

東大理学部を離れるにあたっての御挨拶

藤井忠男（物理学教室）

本年3月の東大定年退官を待たないで昨年10月半ばから神戸大学理学部に移りましたが、ここに改めて御挨拶させていただきます。

私は若い頃から放浪癖があったのか、昭和23年東大理学部物理学科を卒業して以来東大理工研、神戸大文理学部、シカゴ大エンリコフェルミ原子核研究所、ブルックヘヴン国立研究所、東大原子核研究所、東大理学部、そしてまた神戸大と転々として参りました。この中には1年足らずしか居なかった所もありますが、結局一番長くお世話になったのは昭和48年から現在まで12年間在籍した東大理学部ということになります。それだけに腰の落ち着かない流離いの旅人を引き止める何物にも代えがたい居心地の良さがこの理学部にあったことは確かです。

東大理学部の魅力はいろいろ挙げることもできますが、私にとってその最たるものは学生の質の良さであったと思います。最近大学の入試制度にいろいろの批判が交わされ私も多くの不満を持って居りますが、また一方では試験制度というものは下手にいじればいじる程弊害が多くなるという経験則と、本質的に優れた学生は制度の如何に拘らず合格する確率の高い事実も

信じて居ます。このような学生に対してやみくもに教えて型にはめ込むよりは、夫々の得意な天性をできるだけ伸ばせるようにそばから見守りながら手助けをしてやるという“教育”という言葉の原点に近いことだけでもやれたのは大きな幸せでした。

専門の高エネルギー物理学の分野では、20年前に帰国して原子核研究所の1.3 GeV電子シンクロトロンで始めた実験が今年の暮れ辺りに現時点で世界最高のエネルギーの電子陽電子衝突型加速器が稼働し始めるまで漕ぎつけたことに感慨を覚えます。しかし今後のこの分野の発展は今までの高度エネルギー成長のハイウェイを走るのではなく、新しい発想と技術を必要とする険しい山道の登はんも含まれると思いますが、幸い東大理学部は素質の優れた若い研究者に恵まれて居ますので、その人達のリーダーシップを大いに期待しております。

在職中はとかく共同利用研究所や国際協力実験の仕事に追われて理学部のお役にたつこともできませんでしたが、皆様から頂きました御理解とご支援に厚くお礼申し上げますと共に、東大理学部の益々の御発展をお祈りします。

(1986年1月30日記)

藤井忠男先生の転任にあたって

釜江常好（物理学教室）

藤井忠男先生のご性格は、研究室のセミナーや打合せに出席するとすぐに判る。横文字の混じった声高な議論が続き、新入りの大学院生が平気で教官や先輩を論破し始める。煙草のけむりとコーヒーと高笑いが部屋のインテリアとなり雰囲気をつくる。先生のアメリカ生活が長かったこと、楽道家で声高でないと言われず出世しないと言われる素粒子実験分野の性質、それにも増して開放的な先生のご性格が相（騒？）乗作用しているに違いない。その先生が生まれ故郷の神戸に転任されることになった。部屋や実験装置は引き継いでも、あの雰囲気まで残せるか不安になる。

先生は昭和23年に本学部物理学科をご卒業後、約6年間東大理工学研究所、神戸大学理学部に務められました。昭和29年にシカゴ大学大学院に入学し、昭和32年にPhDを取得された後、シカゴ大学エンリコ・フェルミ研究所、ブルックヘーブン国立研究所に勤務され、生れたばかりの巨大加速器による素粒子物理実験の若手研究者として活躍されました。当時のブルックヘーブン国立研究所は世界最高エネルギーを誇るAGSシンクロトロンが稼働を始めたばかりで、毎月のように新しい発見が続いていたのです。先生は陽子・陽子散乱で核子の励起状態を系統的にしらべる実験で、多くの共鳴状態を見出し、そのスピン等を同定されました。先生のお仕事で私にとって印象深かったのは、自分が取組んだ研究テーマ（中性K中間子の崩壊）に日本人の名前、T. Fujiiが出ているのをプリンストンでの大学院生時代に知った時のことです。日本国内に素粒子物理実験を根付かせたいと願う人達に説得され、東大原子核研究所に着任された

のは昭和40年だったと聞いています。今の大学院生には想像もつかないと思いますが、光電子増倍管を1~2本単位で輸入し貴重品扱いする時代だったのです。その中で、数本のシンチレーション・カウンターと小さな電磁石だけで γ 線によるK中間子発生およびKA系の研究を完成させ、原子核研究所を世界に売り出されたのは、国内の研究者に強い感銘を与えました。以後理学部物理学科に移られてからも、ブルックヘーブン時代の延長とも考えられる γ 線を使った核子の励起状態の研究が続けられた後、高エネルギー物理学研究所の陽子シンクロトロンの完成を機に活動の中心を筑波へ移されました。

藤井先生の研究生活に一貫して言えるのは、自分達の研究費、人数、経験を冷静に判断し背伸びしすぎず着実に進むことだと思います。保守的と取られるかも知れませんが、そうでなく、「物理屋は物理の成果で判断される」とのお考えが強いのだと思います。「如何に新型で高価な装置を使っても、物理の成果が出せないのならだめだ。」そう教えられて来たような気がします。

藤井先生の明るい、フェアなご性格は、国内外の研究者が先生に寄せている絶大な信頼でもはっきり判ります。長年にわたり原子核研究所、高工研、学術会議物研連、種々の科学財団、IUPAP、日米科学技術協力事業などの運営の中核となり、揺籃期にあった日本の素粒子物理実験を、欧米に互する今日にまで育て上げられた一人でもあります。また本学においては、数多くの優秀な卒業生を研究者や社会人として送り出されて来ました。

この様なご活躍は、神戸大学理学部に移られた後にも続くものと思いますが、本学を去られ

る機会に、私達一同、今までのご恩に感謝の意を表したいと思います。また同時に、学会や研究会で、煙草の灰の舞う四角いフェルト地を囲

んで、あの楽しい雰囲気浸らせて頂ける様、願ひする次第です。

愚 生 の 夢

橋 本 英 典 (物理学教室)

恩師今井功先生の御足跡をこの広報に書かせていただいたのはつい昨日のような気がするが、すでに11年の昔になる。

かえりみて昭和21年といえば終戦の翌年、理学部一号館の南西隅にある先生の部屋のドアを思い余った心のままにノックすること再び、その門に入れていただいて以来流れの上に過した才月は40年に近く、盧生の夢もかくばかりかと思ひ知らされる今日此の頃である。

理学部においていただいた卒業後の8年余、京大航空、米国ボルチモアのジョンズホプキンス大、航空研究所、再びボルチモア、宇宙航空研究所そして48年冬以来の理学部でのこと、とりとめもない回想がかつ消えかつ浮んでとどまるところを知らないが、やはり書くことの手はじめとしては修業時代のことになるであろう。

1年半の後期学生生活（前期は戦時中のためか半年で終わった。いまの4学期よりもっとつまった時間割である。）の前半は生きるためのあがきと、その間をぬっての輪講にほとんど終始した。輪講といっても、唯一人の学生である私がたまたま手持ちの本ということでスレーターのIntroduction to Chemical Physics を今井先生と当時大学院生であられた異友正さんの前で毎週回進講申し上げることで、流体の本は未だしであった。（土曜日の午後の諸先輩方の輪講にも入れていただいたがこちらはサイツのTheory of Solidsであった）。後半になってアルバイトも私立中学の時間講師と高級化し暇

もできた頃、高速気流に対するWKB法の研究という題目で先生のお手伝いをやっとならせていただくことになった。流体の本といえば空襲で本屋が焼ける前に入手したラムの海賊版と、現代流体力学の祖として先生が講義の始めに鼓吹されたプラントルのこれも海賊版を少しかじっただけの私に貸していただいたのは先生の別刷教編とデューラニットの6巻本Anodynamicsの第3巻であり、プラントルの粘性流体（p. 34～208）の項もあったが読むことをすすめられたのはp. 209～p. 250のテイラーとマッコールの圧縮流体の項であった。

WKB法の何物であるかはケンプルやパウリの本と先生の解説で後に知ったというわけで、夏の日々は先生の御部屋を下駄ばきで訪れ、タイガー計算機を廻すことに終始したが、不思議に暑かったという記憶はない。

9月の声を聞けば卒業である。おくれればせながら就職のためのいくつかの試みも空しく、迷いぬいた末に旧制の大学院に入れていただいた。古い卒業生名簿では理工研の所属になっているものの、駒場にも本郷にも机をいただけるには至らなかった。大学入試も含め、ペーパーテストを受けたのは諸学友の御尽力もあって、選択科目であった小穴先生の幾何光学唯一つ、それも可をいただいた学生とあってか、大日本育英会創始以来の奨学金も打ち切られた日々であったが、世の中がどん底のせいもあったのか不思議と苦しかったことは覚えていない。もっとも

翌23年の春、9月30日にさかのぼって東京帝国大学理学部副手を嘱託し月手当400円を給するの辞令をいただいて、すべてが帳消しになったせいもあろう。ちなみに10月1日から政令204号により、東京帝国大学は東京大学になり、23年3月31日嘱託制度廃止により廃嘱、4月1日改めて任命というのが私の履歴書のはじめにある。

机の方は現在の一号館309号室の西隅におかれた大きなデスクを中島貞雄、森本弘文、会津晃、碓井恒丸などの方々がそれをとりかこんで座ってられるベンチの一隅に割り込ませていただく始末、あらゆる所から引き揚げて来られた方々で満員で、まともな机をお持ちなのは、その部屋に古くからおられた加藤、木原、久保の諸先生方であった。隣りの部屋305も中村、岩田、南部の方々が居られ、物性関係のゼミに顔を出すばかりでなく中村先生等の肝入での朝永先生らの講師を招いて毎回会費を徴収される物性学ゼミナールも聞かせていただいているうちに多くの方々が職を得て巣立って行かれた。やっと独立した机をいただく前に、突然南部さんらの後の物数演習を命ぜられ、年長の学生もいるクラスに臨まなければならなかった悲壮感を受験の夢のかわりに準備を忘れた夢を見たことでもわかる。

そうこうする内に、学生の時の計算を今井先生がまとめてJournal of Mathematics and Physics (MIT刊現Studies in Applied Math.)に投稿して下さり、共著者としていただいたのが昭和25年に活字となり無上の喜びを味わった。文科の友人にその話をしたら不思議な顔をされたのも印象に残っている。昭和24年に臨職の制度は廃止となり、副手は助手に切りかわっていたが、研究の上では学生のとときは異なり相談には乗って下さるがこの問題をやれという御指示もないし、見よう見まねで独自の道を開けということかなと、2次元高速気流で先

生始め先輩方のやられた近似を高めることから始まり、3次元の問題に進もうということになった。その中でも、3次元の物体を過ぎる音より遅い流れの遠方での挙動と物体に働く力との関係がわき出しのある場合も含めて、2次元の場合の今井先生の方法をそのままを踏襲し、それよりやさしく出て来たのは幸運であった。昭和26年に物理学会のジャーナルに出した論文の別刷を小谷先生方の御尽力で学術会議から外国に送付していただいて、Mit besten Empfehlungen L. Prandtl という署名入りの受取りの葉書をいただいたのは思いがけないことであった。

その論文の超音速篇も予定していたのであるがそのままになってしまった。当時続々として入って来た戦中、戦後の欧米の研究の衝撃の他に28年8月15日プラントルの死があったこともあったと思う。

昭和30年にいただいた私の学位論文が高速気流でなく粘性流体中の柱に沿う境界層の発展に変っていたのもこのような挫折と、見よう見まねでそれまでに覚えたWKB法、等角写像、超音速の流れでその有力性を示唆されたプラズマ変換などの救いによるものであった。

何かを書かねばならぬという焦燥感が雑然とした居室の中から見つけ出したプラントルの葉書を枕にして、とりとめのない話になってしまったが、あらゆる分岐点は異なる様相の上いくつかの相似性を兼ね備えるというどこかで聞いた言葉を副えさせていただきたい。

修業の時代から幾才月、幸いに邯鄲の歩みに落ち入ることなく今日に至ることのできたのは多くの方々のお導びきと支えによるものであり、こればかりは夢では現実であったと深く感謝申し上げる次第である。

橋本先生を送るに当って

神 部 勉 (物理学教室)

永年にわたる御指導・御活躍、心から御苦労様でしたと申し上げたいと思います。しかしながら、私ども後進の者と致しましては、実は先生にここで引退していただくわけには参らない事情がございます。先生には申し上げるまでもないことですが、流体力学界では現在、国際的な英文誌の創刊の準備をしており、先生はその編集長の重任に当っておられるわけですし、来年には国際会議がひかえております。たまたまこの時期が東京大学御退官の時に当たったということだけで、先生には今後も現役で御指導いただかねばなりません。幸い、いつまでも先生は気持ちがお若く、お体も丈夫でいらっしゃいます。

先生の研究上のお仕事は多岐にわたりますが、何にも増してお名前を有名にしているのは、Hasimoto vortex solitonおよび Hasimoto-Ono の水波の方程式かと思います。面白いことに、いずれも非線形の一次元シュディンガー方程式で記述されることを導かれたわけです。その研究が完成された頃は、私もそばで仕事をしておりましたことは、研究者として幸運だった

と思っております。その他、粘性流の種々の厳密な解がありますが、特にお若かりし頃、電磁流体の流れで、物体の前方にもその影響が現れる forward wake の解を示し、それをアメリカの学会で発表して、国際的な反響を得た経緯を、御自身で回想しておられました、それが大変印象に残っております。

多少私的な事情を書くことをお許しいただけるなら、先生の研究室が駒場の宇宙航空研究所にありましたとき、私を助手としていただいていたから、この3月でちょうど20年になります。その間研究上も陰に陽に御指導いただきましたこと、ここに心より感謝申し上げたいと思います。

その後、本郷に移られてから、多くの研究者を育てられ、それぞれ民間の研究所、国立の研究所、大学等で活躍中であります。さらに先生の門下には2人の外国人留学生も含まれていました。彼等もそれぞれの国の中堅の指導者として活躍しております。

御退官に当り、永年の御苦労をお労い申し上げますと同時に、今後も現役としての御指導・御活躍をお願い申し上げたいと思います。

論 理 の 飛 躍

岡 林 孝 郎 (物理学教室)

理論物理学、特に場の理論や素粒子論では、実験事実の他に、論理の必然性に支えられた、飛躍とも見える様な斬新な発想に依って大なり小なり一時期が画される。

アイソ・スピンとハイパーチャージとを統合した群に基く複合状態の分析から、従来の単位

の整数倍ではない電荷を持つクォークへ。左巻の電子とニュートリノ（ミュー中間子とミュー・ニュートリノ）をアイソ・ダブレットに組む一方、右巻の電子（ミュー中間子）をシングルレットとする電磁的相互作用と弱い相互作用との統一。その前身である湯川理論では核力（強い

相互作用)とベーター崩壊(弱い相互作用)との統一的記述から中間子が考えられたが、此はエネルギーの保存則から考えられたニュートリノの存在と共に、新しい粒子の予言の先駆である。もっと画期的だったのは特殊相対性理論と量子力学との融合に基いた陽電子論であろう。量子力学で考え得る最大限の可能性としての磁気単子にも其と似た発想が窺える。此処には、その成否は別として、判り易い例を挙げたが、もっと抽象的な次元でも事情は同じである。

さて、論理の飛躍には種んな面から主観が入って来る。飛躍をして迄も執着すべき問題であるか。飛躍するより道が残されていないのか。そして此等の間には、“未だ飛躍をしなくても意味のある情報が得られるのではないか”と云う認識の段階がある。場の理論の発散の困難に関しての湯川・朝永両先生のアプローチの違いは良い例であろう。“反動ならざる保守”を口にしておられた朝永先生が繰込法で成功されたのに対して、湯川先生は其以前から場の理論の根本的な改良を意図されており、後になって非局所場の形となって現れた。又、量子力学の誕生に関してのドゥ・ブロイとハイゼンベルグのアプローチも対照的である。ドゥ・ブロイは光と電子との対比や特殊相対性理論からの類推

に基いて早い段階で飛躍をした。此に対して、ハイゼンベルグは、ボーアに始まる所謂前期量子論の記述の中で“暗号の解読”と云う最小限の飛躍で量子力学の基本法則(粒子の位置と運動量との間の交換関係及び運動方程式)を与えており、此のアプローチでは量子力学は恰も現象論であるかの様に見える。飛躍の仕方が研究歴や研究環境に依る事は説明を要しないであろう。

云ってみれば、飛躍は主観の固の様なものであり、その評価も亦主観に他ならない。(最終的には、実験が審判を下す事になるのだが)。大なり小なり成功すれば飛躍は報いられる。併し、そうでないものは「何故そんな事を考えるのか」と云われるのが落である。其は、実験とは違って、理論は紙と鉛筆とで何でも自由に考えられる事への代償であるのかもしれない。

何時の事だったか、“大学は教義の伝承の場である”と云う意味の言葉を学内広報の談青評論で読んだ事がある。人に嘖われ乍らも真剣に“馬鹿”な事を考えるガリレオ以来の科学精神も伝承して欲しいものである。特に、一昔とは違って指導原理が未だに見付からない現在の素粒子論では、物理観に支えられた大小の飛躍がもっと試みられて良いのではなからうか。

岡林さんのこと

和田 靖 (物理学教室)

私にとって岡林さんのお名前は、自分の若い頃の記憶と結びついています。物理の4年のクラスに素粒子論をやりたい仲間が三人いました。大学院にとって頂けるかどうか知りたくて、恐る恐る山内恭彦先生をお部屋にお訪ねしました。用件を聞かれるなり先生は言下に「お前達は教育大へ行け」と仰いました。昔から従順だった

私達はおとなしく教育大へ行きました。

教育大へ行ってみると、その活発なこと驚くばかりでした。朝永先生をはじめ、偉そうな先生先輩が綺羅星の如く並び、コロキウムの際のM1は壁の花どころか壁のしみのようでした。M1には講義らしい講義もなく週一度の演習があるきりでしたので暇でした。そこで私は本郷

の素粒子研のセミナーに出させて頂くことにしました。セミナーに出てみますと、これは又驚いたことに若い人ばかりで、先生らしい人は一人もいませんでした。このセミナーを主宰していたのは細縁の眼鏡をかけ気難しい顔をした痩せた人で、人の話に文句ばかりつけていた若い助手でした。それが岡林さんだったのです。

当時の素粒子研は中村誠太郎先生がお病気で、もう一人の助手の宮沢さんはシカゴへ行かれてお留守という、いわば非常時だったのです。それだけにゼミの人達には悲壮感に似た緊張があり、自分達が何とかしなければと考えているのがよく判りました。この人達は当時こそ無名でしたが、やがて大きな仕事をして有名になった人もおりました。人材をつくった点では教育大のはなやかなコロキウムとくらべて、優るとも劣らぬ大きな寄与をした小さなゼミでした。

岡林さんはそれまで病気で休んでおられ、やっと健康を回復してこれから仕事をしようと言われておられた時期だったようです。研究者として歩み始めたときに、研究室の責任も担われたのですから御苦労はたいへんな反面、やり甲斐のあるときだったに違いありません。

岡林さんはやがて私に向かって「君もゼミで話をしますか」と言われました。毎週来ているのだからよそのM1でも教育してやるかと思われたのか、ゼミの人数が少なくて大変なので一回分割当てて息抜きをしようと言われたのか、どちら

かは判りません。とにかく、カープラスとクラインという2人の共著のポジトロニウムの論文紹介をすることになりました。これがまた複雑怪奇な論文で、第一見付かってもいない粒子の寿命など何故計算しなければならないのか納得せず勉強するのですから大変です。ただ岡林さんに軽蔑されたくない一心で論文を読み紹介をしました。むろん褒めてはくれませんでした。軽蔑した風でもありませんでしたので、ほっとしたのを覚えています。やがて私の興味も素粒子から他へ移り、本郷のゼミにも出なくなりました。

何年かして大学院を卒業すると、思いがけず助手として本郷へ来ることになりました。その頃の素粒子研は昔とは大きな違いで、梅沢博臣先生が着任し、宮沢さんも帰国されて充実した研究室になっていました。岡林さんは責任から解放され、御自分の研究に打ち込んでおられましたが、少しお淋しそうに見えたのは気の故かも知れません。その後、御結婚と海外での御研究の時期がありました。岡林さんの学部教育の厳しさは有名で、量子力学演習では長年に亘って多数の学生がしごかれました。又物理図書室の充実には使命感をもって努力して来られ、今その恩恵を我々が受けているところです。

岡林さん。長い間御苦労さまでした。これからもお元気で素粒子論の研究を楽しんで下さい。

宇宙の易学 39年

海野和二郎（天文学教室）

別に初めから志したわけではないが、この39年間、宇宙の易学だけをやってきたような気がしないでもない。とはいっても、易経も読んだことのない全くの自己流易学である。しかし、私の占は良く当るのである。（当りまえのこと

しか占はない。）私の自慢は、学問的業績において既に私を超えた弟子が沢山いることである。

（占の成果！）しかも、その弟子にはまた弟子が居り、近頃では更にその弟子が居るといった時代になってきたので、私自身は正にマルチ商

法の元締のような心境で居るのである。尤も、弟子といっても私が何か指導をしたようなことはまるでないか、たまには指導した場合でも役に立たないことしか教えなかったので、弟子といっても全く主観的なものにすぎない。同様に、趣味の基においても、実力に関係なく天文流家元を名乗っているのである。

私の主観的占の一つに陽震学の爆発的發展がある。X線天文学の理論的基礎である降着円盤学と同程度のスピードで同程度の発展をすであろうことを占ったが、大体そのようになってきている。陽震学は太陽の振動（多数のモードがある）を観測して、太陽内部の構造と運動を知る学問分野で、地震学とのアナロジーでつけた名前である。近頃は、非常な勢で陽震学が星震学に発展しつつある。さらに、次の卦においては、非線形力学系の進化の概念は宇宙観を変えようとしている。

ところで、理学部の将来を占ってみるといささか心配な卦が出ている。それは総合大学院の問題である。国立大学共同利用機関（共同利用研）が博士課程の大学院を持つという総合大学院は、一流装置のある場所で大学院教育を行うという点で大変機能的にみえるが、教育というものの本来の姿を見失った危険な構想である。総合大学院が失敗におわるだけならまだしも、全国の大学の大学院教育に悪影響があるので気をつけないといけない。

生物は生まれてくるまでに、それまでの進化の過程を繰り返すといわれている。研究者の育成にもそれに似たところがある。外国で出来上って製品となった科学をただ受け売りするだけの時代は終わった。自ら独創する研究者を育てるには、特定分野に専門化された場で切り花的な教育を行ってできることではない。学問の発展は、その源流をなす三つ以上の分野が非線形力学的に相互作用して新たな階層構造をつくっていくことにあるので、独創的な研究者を育成す

るには源流となるいくつかの学問分野が共存している場で行なう必要がある。一旦成長してしまうと、人は環境に印加されて獲得した資質も本来自分が持っていたもののように思い込んでしまう。しかし、伝統の力は無視し難いことがわかるように、環境の影響は非常に大きい。共同利用研は単独ではよい大学院教育機関ではあり得ない。

一方、共同利用研は大学院生や若手研究者が大いに研究活動をするのできる場でなくてはならない。共同利用研の教官が大学の大学院併任教官となる制度は是非必要である。この制度により、大学院生は大学に所属し、安心して共同利用研で研究にはげむことができる。大学は共同利用研をまるごと利用し、共同利用研は大学をまるごと利用するのである。大学側も、大学院に関しては、学内のみならず共同利用研ともイコールフットイングの建前で開かれた大学になる必要がある。また、共同利用研は、大学院生を受け入れると共に、充実したポストドクトラルフェローシップを持つ必要がある。一方、大学院生も5年の年限をまたずに、すぐれた研究をすれば学位を得ることが出来るようになっていく。この二つの制度がうまくかみ合えば、理想的な若手研究者の育成が可能である。

長らくお世話になりました。皆様の今後の健闘と理学部の繁栄をお祈りいたします。



海野先生を送る

尾崎洋二（天文学教室）

海野先生にはじめてお目にかかったのは、25年以上も前の私が学部学生の時である。当時の天文学教室は麻布のソ連大使館横の木造の見すばらしい建物にあったが、その建物がアメリカ帰りのハイカラな先生の雰囲気似つかわしくない気がしたのを、今でも覚えている。私が大学院で直接指導を受けるようになった当時の先生は、プリンストン大学、ミシガン大学での2年間の研究生生活を終え、帰国まもない頃で、いわば研究に一番脂の乗った時であった。当時の天文の大学院生は、自分の研究課題について新しい考えや進展があると、まず先生の所へ行って報告しディスカッションしてもらうのが通例であった。そのため、先生の研究室は門前市をなすがごとくで、先生の空き時間を見つけるのに苦労する程であった。先生は、こうした大学院生の話に忍耐強く聞かれ、適切な助言を与えると同時に学生の話のなかに何か秀れた点を見つけ出し、さらに研究を推し進めるよう励まされるのが常であった。こうして先生に励まされて一人前の研究者に育っていった者は、私を含めて沢山いたと思っている。

先生は昭和22年本学天文学科を卒業された後、東京天文台助教授を経て昭和28年理学部天文学科に移られ、以後一貫して天文学科の教育・研究の中心的指導者として現在に至ったのである。先生の御専門は理論天体物理学であるが、その内容は輻射輸達、太陽磁気流体力学、恒星安定性論など大変多岐にわたり、沢山の優れた論文を発表されている。例えば、先生が世界にさきがけてされた磁場のある場合の輻射輸達の定式化は「海野・ラチコフスキーの式」として30年後の現在でもよく引用されている。また先生の

流体力学、電磁流体力学的研究は、対流・脈動・不安定性などの広範囲の現象をカバーし、また対象となる天体も、星間ガスから太陽・恒星そしてクェーサーとほとんどすべての天体におよんでいる。

先生はまた、天文学科主任、大学院主任、東京大学評議員などを務められるとともに、日本天文学会副理事長、同欧文報告編集長など学会関係のためにも力を尽された。

先生の学問に対する態度は大変オープンで、天文学を研究したいという人はすべて受入れるというのが先生の基本方針であった。そこで、学生が自分のやりたいという研究テーマに適切な指導教官が見つからないという場合、大抵先生が指導教官を引受けるということになり、いつも先生が一番沢山の学生をかかえるという結果になった。また先生は留学生の受入れにも熱心で、特に最近数年はアジア諸国との交流に力をそそがれ、御自身でインド、中国、韓国の国々を訪問され、これらの国々の天文学者との交流を深められた。

あまり知られていないかもしれないが、先生は趣味の面でも多才で、旧制高等学校時代に熱中された剣道は二段の腕前。また囲碁では御自身“天文流家元”を唱えられ、中国訪問の際も中国の天文学者との対局を楽しまれた。私自身は不肖の弟子で先生のお相手があまり出来ず残念であった。それでもかなり以前の事であるが、私が井目置いた上で先生に一局打っていただいた事がある。その時私が置石を利用して逃げまくったら、先生は「金持ケンカせず、金持ケンカせずか」と口の中で言いながら打たれた様子が面白かった。先生の多才ぶりを示すエピソード

ドに、昭和30年代のはじめフルブライト留学生として氷川丸に同乗した“口八丁手八丁”の名大早川幸男先生さえも、先生の勝負事での強さに舌をまいたという話がある。また、先生の化石の収集は本格的で、中には大変貴重なものも

含まれているとの事である。

私にとって先生は大学院以来現在までずっと直接の指導者であったわけで、今回の先生の定年退官には感無量のものがある。今後とも先生の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

去 る に あ た り

不 破 敬一郎 (化学教室)

あちこち飛び廻った末に、やはり最後は理学部化学教室のお世話になってしまったという感が強く致します。芝白金台町に旧宇和島藩士が集って住んでおり、大正末に其処で生れたのですが5才の時鎌倉稲村ヶ崎に移り、京城(今日韓国ソール)、福岡といずれも5年づつ居り、20才に東京に戻って化学教室に入学、10年後ボストンに参り、足掛け15年たって、又東京に戻り、その後の15年間前半農芸化学科、後半化学教室でお世話になりました。その間に分光分析のフィールドも、DCアーク、化学炎の発光法の時代から、原子吸収法の時代に移り、しばらく続いてから、今またプラズマ発光法の時代になって居ります。歴史が繰り返して居るようです。

化学科の旧新館が取りこわされ、旧館との堺の白い壁が露出して居ます。40年前に前期の学生実験室であり、10年前から引越まで研究室として使った私にとってなつかしい旧新館が無くなり、これも時間の流れを感じさせられます。永年学生実験室として、随分薬品が染みついて居た処を、佐佐木行美さんが無機合成の実験室として更に永年薬品の使い放題をやった後、私の実験室となり、微量分析をせよというのですから、流石に少々ためらいました。最近おはやりの「クリーンルーム」が何故微量分析に必要であるか証明すれば良いのかなと思っている

中に、原口紘彦さんを中心にした研究室員、学生諸君はどんどん仕事を進めました。その姿は本当に頼母しく感謝しました。水銀の室内バッククラウド値は果せるかな高く、予期通りでしたが、フッ素のシグナルも高く出て、空気中にあるのか、装置的に出るのか決着が着かず、私は多分前者であろうと今でも思って居ます。教授室は浜口博先生の後で、旧館の218号室、今の理学部会議室201号の隣りの準備室でした。学生の頃、書庫であった部屋です。会議室が図書閲覧室。従って三角形の妙な形でしたが、天井が高く、ウェッジを振りまわしても十分余裕があり、おまけにグリーンの絨氈でしたので、ハンデキャップが2つ位良くなりました。部屋付の秘書であった菊地博子さんの御努力で大型クーラーも入り、大変気に入っていたので、化学新館の建設には積極的でなく、委員に任命されましたが、全く働かず、大木道則委員長には申し訳なく思っております。

ユネスコの中に、「人間と生物圏」(Man and the Biosphere, 略称MAB)というプロジェクトがあります。生物圏は、地球化学の歴史の中で、岩石圏、水圏、気圏の3圏が出来てから、最後に追加された特別な圏です。動植物それ自身の他に生物に接触する水圏、気圏、更に岩石圏の表層部——土壤——を含みます。人間もその中に含めて考えていたのですが、どう

やら他の動物とは異って、近年地球上に大繁殖し、横暴なる振舞をはじめたので、元来の生物圏から切離し、それと相対するもの、そして両者の調和をはからなければ、人間の将来も危機に到るというので、出来たのが「人間と生物圏」のプロジェクトです。所謂環境問題と同義語であります。国際学術連合の中にも、同様に環境問題委員会 (Scientific and Committee on Prob-

lems of the Environment, 略称 SCOPE) が出来、日本ではいづれも学術会議で取扱って居ます。環境科学は巾広く、すべての科学と関連がありますので、4月以降学園都市にお出での節は、是非環境庁の国立公害研究所にお立寄り下さるようお願い致します。永年の御厚情に深く感謝申し上げます。

不破先生夏話

— 人魂の分光學 —

原口 紘 蒸 (化学教室)

不破先生に初めてお目にかかったのは昭和44年6月初旬であった。当時を思い起せば、同年1月安田講堂事件があり、その結果大学入試が中止になった年である。6月になっても、このような紛争の余韻が構内にくすぶっていた。先生は昭和30年フルブライト留学生として渡米されて以来、ハーバード大学の14年間の研究生活の後、農学部農芸化学科の分析化学講座の担任として帰国された直後のことである。それから約17年の歳月が、アッという間に過ぎてしまった気がする。

先生は昭和49年3月から国立公害研究所計測技術部長を兼任され、昭和50年4月から理学部化学教室無機化学講座に転任された。私は、昭和49年に国立公害研究所、昭和53年から化学教室にと移動したので、17年間のおつきあいといっても、農学部、公害研究所、理学部と場所を変えてのおつきあいであった。いずれの研究室、研究所とも新設であったので、零からの研究のスタートを御一緒に経験できたのも懐しい思い出である。

先生のお仕事は、原子・分子スペクトルを用いる微量元素の高感度分析法の開発と、その生

物無機化学、生物地球化学、環境科学に関する応用研究が主である。渡米以前の化学教室時代は、柴田雄次先生が大正2年欧州留学の帰途持ち帰えられ、我国分光化学研究の端緒ともなった Adam-Hilger 社製 E-2 型分光器を用いて、陰極アーク中の CaF、BaF 分子バンドを利用する微量フッ素定量法の開発研究をなさったそうである。滞米中はハーバード大学医学部生物物理学研究室で、B. L. Vallee 教授とともに金属酵素の先端的研究に携さわれた。この間不破-Vallee長光路吸収管原子吸光法を開発され、ppb (10^{-9} g/ml) 以下のレベルの亜鉛やカドミウムなどの超微量分析を実現されたことによって、多くの亜鉛酵素のほか、現在話題になっているカドミウム含有タンパク質メタロチオネインの発見が可能になったとおうかがいしている。帰国されてからも多くの興味ある研究をされてきたが、ここでは先生が最も残念に思っておられるであろう研究を紹介して送る言葉に替えさせていただきたい。

筆者は昨年の共通一次試験の際、天文学教室の海野和三郎先生と御一緒する機会を得た。その時“ヒトダマ”の話がでた。というのは、不

不破先生は学生時代から生物に興味をもち、農学部
の坂口謹一郎先生の研究室に出入りしておられ、
坂口先生から“ヒトダマ”はリン酸還元酵素による
ものではないかと示唆を受けられたそうである。
すなわち、リン酸 (PO_4^{3-}) が酵素還元を受けて
ホスフィン (PH_3) となって気化し、このホスフィン
が空気酸化によって化学発光をするために、一種
のリン光のように光るのであろうと考えられる。
先生は事あるごとにこの話をされ、誰かにこの
研究をやってもらいたそうな顔をしておられました。
数年前に研究室の勇敢な諸君がやっとこの研究
を手がけ、苦戦している時期であったが、その頃
に海野先生とお会いしたのである。雑談の中で天
体、宇宙、プラズマ等の話をしているうちにた
またま“ヒトダマ”の話がでたのである。すると
海野先生は興味を示され、一度その話を理学部
広報に書くようにと薦めて下さった。

私はそれまで知らなかったが、ある物理専門
誌に“ヒトダマ”の話があり、寺田寅彦全集か
中谷宇吉郎全集にその記述があることを海野先
生が憶えておられた。その後調べてみると、中
谷宇吉郎随筆選集第一巻の「冬の華」に寅彦夏

話としてその話が紹介されていた。その骨子は、
ある物理学者が“ヒトダマ”に遭ったのでその
中にステッキを突っ込んでみたら先の金具が少
し暖かったという論文を見つげられた寺田先生
が門下生にその話を披露され、誰か探して読ん
で見給えとおっしゃったので早速中谷先生が読
まれ、案外つまらなかったと言ったら、寺田先
生に大変叱られたというエッセイである。私は
何人かの人にその話をしたまま忘れていたが、
この稿を依頼されてからたまたま野田春彦先生
の近著「生命の起源の謎」を読んでいたら、同
じ“ヒトダマ”の話がでてきた。そこで、海野
先生とのお約束を思い出し、また不破先生との
話の種になればと思い、この機会を利用して紹
介させていただいた。残念ながら、研究の方は
その後進展もないので、先生も心残りではな
いかと察する次第である。

先生は4月から国立公害研究所副所長として、
江上信雄先生（前理学部長）と御一緒に科学研
究・行政の任に専心されるとのことである。こ
れまで御指導を受けてきた門下生と一緒に、益
々の御発展と御健康をお祈りしたい。

三 崎 からの ね が い

木 下 清 一 郎 （臨海実験所）

三崎臨海実験所のまわりには、数々の入江が
あり、その先は相模湾にひらけています。私
たちがこゝで日々研究にいそしんでいられるのは、
この海にすむ生きものたちのおかげです。三崎
の名が世界にひろく知られ、各地から海洋生
物学者が訪ねてきてくれるのも、実験所が装
いを新たに、明日の生物学研究の中心たらん
としているものも、他に類をみない豊かな生
物相があればこそです。

ところが最近になって、私たちにとっては命
の綱ともいべき生きものたちが、次々に姿を
消してゆくので心配しています。

実験所のまわりの海岸をみてみますと、海
岸道路や護岸工事によって、汀は次々とコン
クリートでかためられ、ぬりこめられた生物
は死滅する上に、あらたにうまれた個体はす
みつく場所を失います。入江の方はヨット
その他がずらりと並ぶ停泊地となって、有
害な有機錫を含

んだ船底塗料が海底につもります。船底にフジツボがつかぬようにする毒物は、同じ甲殻類であるエビ・カニにも害を及ぼし、夏の暑い日に油壺湾一面にインガニなどが浮いたことがあります。

岡の上では一面の宅地造成で、京浜急行の三崎口駅から油壺までの間も籬壇の宅地が続きます。この生活排水は必ずどこかの入江の奥に口を開いて流れ込みます。汚水の処理が多少してあっても、湾内の極端な淡水化はまめかれません。これに加えて、自然の磯が備えている海水浄化能は、コンクリート壁にかえられたため甚だしく低下しています。さらにこれに輪をかけて、湾の入口には防波堤が築かれて水の出入りをさえぎりますから、海の生きものにとっては地獄です。

三崎で発見され、学名に *misakiensis* の名をもつ動物が、一つまた一つと居なくなっています。ミサキギボシムシなどもその一つです。

こういう状態は、大学の敷地から離れたところでおこっているではありません。大学は臨海実験所のまわりに、かなり広大な敷地をもっており、海岸に面した部分が当然あるわけですが、肝心の汀の部分には大学の力は及ばないのです。どこかの力が及んでいるかというと、三崎の場合は水産庁の管轄下にあつて、漁港整備上

の必要があれば、潜在的には先方に法律上の優先権があります。その上に共同漁業権もこの部分に及んでいます。そして大学には慣例上はともかくとして、実際には何の権利もないというわけです。

例えばカリフォルニア州の法律では、大学の管理下にある海岸線内にはライセンスをもった者以外は立ち入ることができず、空き缶を地中に埋めても罰せられることが明文化されており、管理地内で悠々と生態観察をしたり、実験動物を育てたりしているのに比べて、私たちの状態はあまりにも劣っています。

私たちの願いは、少くとも大学の敷地に接した海岸線沿いの汀には漁業権に匹敵する研究権ともいべきものが設定されて、動物の圃場としての役割が果せるようにすることと、更に願わくは三崎の生物相全般を日本の誇るべき文化財の一種としてサンクチュアリに指定し、人工的な影響からある距離をおくことの二つです。これまでも文部省、環境庁その他へはたらきかけをしてきましたが、十分の反応は得られていません。

三崎を去るにあたって、臨海実験所に対して理学部の皆様からの今後の応援をお願い申し上げます。

木下清一郎先生

重井陸夫（臨海実験所）

とても60才には見えない、スラッとしてかっこよく、トークは爽やかで、気配りは人一倍、好感度抜群というのが、後輩や学生達の木下先生に対する一致した評です。お若い頃に教鞭を取られたお茶の水女子大では皆の憧れの的だったと、かつてのお嬢さん方が話しています。や

や辛口の大学院生や若手研究者の間では、大学教授のイメージにそぐわない？ つまり権威の誇示や揚げ足取りとは全く無縁の所にある先生とされています。どこかで聞いたようなセリフではありますが、先生が最もお嫌いなのは、人間同士がののしり合ったり争いあう事だそう

です。そのお名前の通りひたすらに清く、通俗的な事には関心を示されず、アルコール類については知性を麻痺させるというご持論があり、タバコは無論だめ、ご趣味はバロック～後期ロマン派のクラシック音楽で、ご自身でチェロの演奏もされます。実験室の機器は昨日買った様に皆ピッカピカで、整然と配置され、研究室の机の上には塵ひとつなく、書棚の本やファイルはきっちりと頭を揃えて並んでいます。ご生活のリズムも分単位とやらで、とにかく先生のまわりには、小説の中から抜きでたような一つの世界が感じられます。

木下先生が臨海実験所の専任教官として過ごされた期間は6年余ですが、実験所との関わりはたいへん古く、30年以上も前に遡ります。当時、ご自分は動物学教室助手でしたが、実質的には実験所の職員のような立場におられ、実験所ご滞在期間中に、ご結婚をされ、ご新婚生活も実験所宿舎で送られました。その後も、研究材料が海産動物であったため、実験所を利用されることが多く、ご縁が切れたことはありません。昭和57年4月より4年間は所長を務められ、よりよい研究・教育環境をつくるべくたいへんお力を尽くされました。そのためには、地方公共団体や地元漁民、あるいは種々の行政機関との神経をすり減らす折衝もあるかと思えば、外来研究者の要望にそった利用体制を整えるために、所員にかなり厳しい試練を与えられねばならぬこともあり、ご心労が積もって、一時期、胃潰瘍を患われることもありました。その後、重要案件は殆ど無事着し現在にいたっていますが、それには先生が職を賭して事態に対処されたという事実もさることながら、つまるところ、行政とは通常相容れない人徳といったものが何物にもまして効あるものだったからである様に思われてなりません。

最後にご経歴とご研究内容を簡単にご紹介しておきます。ご出身は山口県・萩市で、昭和28

年3月に旧制の本学部動物学科をご卒業、大学院を経て30年4月に動物学教室の助手となられ、35年5月にお茶の水女子大学に講師として赴任され、36年同大学助教授、昭和40年12月には助教授として再び動物学教室にお戻りになり、まず放射線生物学講座、次いで動物学第二講座に所属されました。54年12月には教授として臨海実験所に転任され、57年4月に臨海実験所長に就任されて現在に至っております。この間、昭和36年8月～38年1月には西ドイツのマックスプランク医学研究所に留学され、60年10月より大学入試センター教授を併任されています。ご専門は動物発生学に関連した細胞生物学で、大学院時代には藤井隆名誉教授に師事され、細胞内の蛋白質SH基と亜鉛イオンとの関係を研究され、その後昭和44年頃までは、鞭毛運動や細胞分裂など、いわゆる細胞運動について、グリセリン処理をしたモデルなどを用いて解析を進められました。46年頃から57年頃までは、細胞の核と細胞質間の相互作用に於けるプロテオグリカンの意義について研究され、以後はウニ胚クロマチンのレクチン親和性変動と遺伝子発現機構について研究を進めておられます。ご研究とご業績の詳しい内容につきましては、また別の機会に、それを解説し、讃えるにふさわしい専門分野の方からのご寄稿があれば幸いです。

尚、2月初旬の現在もなお、先生は自ら試験管を振り、遠心機を回して実験に励んでおられます。



東大を去るにあたって

桐村 康子 (数学教室)

東大での勤務もあと1カ月半となった今、ふと思い出したことは、昨年の夏ごろだったでしょうか、大図書館の横の道、弓道場側の木かげを歩いていたら、理学部を退官されたK先生にお目にかかり、御挨拶すると「あなたはまだいたんですか」と仰言る。「はい、来年の春には定年でございます」。「そうですか、僕はもう卒業しましたよ」と先生は独特のはにかんだような微笑をうかべて去ってゆかれたこと。

過ぎ去った年月、この目まぐるしい世の中からちょっと奥に入った静かな大学で長い留年を続けていたようで、物理教室から数学教室へ転科して見たり、さして立派な成績もとらずに卒業が目前にきてしまったという感じです。本年度の学生の卒業式がすんだら、私もほんとに実感が湧いてくるかもしれません。あまり長く居つづけたので、何時までもこの生活が続くような錯覚からか、不思議なくらい切実に感じられないのです。

卒業後の青写真もないわけではないのですが、それもまだ何となくよそよそしく、何冊ものアルバムをめくっている此頃です。

勤務したばかりで、それこそ右も左もわからない者を辛抱づよくお使い下さり、不幸の折には一方ならぬ助力と暖かいお心づかいを頂いた物理の小谷教授をはじめ諸先生方の思い出、数学に移り、全く経験のなかった教務の仕事をした

どたどしく始めた頃、いつもおだやかにお導き下さいました弥永、河田両教授をはじめ数学の諸先生方の思い出、これまで一緒に働いてきた大勢の職員の方々との思い出。それらは、これらの生活の中でどんなにか、私を暖めてくれることでしょう。

東大の戦後40年間の歩みの時期を、殆んど共にすごし、その発展の歴史と、学問に専心される多くの研究者の生活を目のあたり見ることのできたのは、私にとって感銘深いことでありました。

構内のたたずまい、三四郎池のほとりの木立の四季の姿、けやき並木の冬のアーチ、秋の終りを華やかにかざる正門の銀杏並木や、あちこちに一本ずっしりと立っている大銀杏の黄葉の美しさを年ごとにあきることなく眺めてきました。この自然の姿が何時までも変ることのないように、かけられた東大の理想も、現実も世の汚濁にまみれずに続いてゆくことを祈っております。

又去るにあたりまして、私のような者に寛大なお計らいを賜りました有馬理学部長、数学教室の諸先生に心から感謝申し上げます。ならびに長い間御盡力下さいました大勢の理学部職員の方々に御礼申し上げます。この多数の方々の御好意を忘れることなく、これからの日々を生かして行きたいと存じます。



桐村さんを送る

藤田昌子（数学教室）

桐村さん、今こうしてお別れの御挨拶を申し上げる時になっても、学年末の教務の忙しさの中で立ち働いていらっしゃるお姿を拝見していると、あなたが間もなく教室を去っていかれるのだとは、とても思えません。

桐村さんは昭和25年、物理の小谷教授秘書として御就職なさり、その後数学教室に移られて教務関係の仕事を長い間担当して来られました。学部学生・大学院生の教務、就職のこと、論文審査に関する事務等、多岐にわたる仕事を受持たれ、その責を果されました。報告の締切に間に合うかどうか、今思うとゾットする様なこともあったと述懐なさっておられましたが、この様な仕事柄、学生に対してどうしても厳しくしなければならぬ時もあり、桐村さんの前で神妙にかしてまっている学生の姿をみうけることもありました。そんな時はまるで母親の様な口調が感じられたものでした。試験問題の印刷、合否資料の作成、採点報告等、学生の進路に大きな影響を及ぼす仕事を慎重に的確に処理してこられた桐村さんは先生方の信頼も厚かったことと思われまふ。また桐村さんの達筆に誰もが認めるところです。今はちょっとした通知、案内まで味気ない機械の字となりましたが、桐村さんの美しい字で書かれた通知など、今後いただく機会もないのかとさびしい気が致します。

大変な読書家でいらっしゃる、大学の行きかえり図書館に寄られてはよく本を借りておられました。読書の範囲も広く、時折面白い話を聞かせて下さったものでした。美術館にもせつせと足を運んでおられましたが、中世のそれもありかなり古い時代の宗教画などに造詣が深く、絵画に限らず古いものへの関心をお持ちでした。激

しい感情の表現より、抑えたもの、内に秘めた表現を好んでいらっしやったと思いますが、それがまた、ご生活の姿勢であったとお見受けしました。長いお勤めの中では、めまぐるしい社会の移りかわりを見てこられました。御家庭では数学者であられた御主人との永訣の悲しみも経てこられました。ある時、古い図書貸出票の中に御主人の名を見出され感慨深く御覧になっていた事がありました。その御主人の学び舎でもあった数学教室をまもなく去られ、御実家のある北陸の地の新しい家で晴耕雨読を楽しまれるとのこと、これからの日々きつとよき稔りが訪れることと存じます。

春の奈良へのたった一度の御一緒の旅を思い出します。二上山の雄岳に眠るかの皇子を偲びつゝ、愛でた大輪の牡丹は、当麻の地で今年もかわらぬ美しさをみせてくれることでしょう。古い街道をひたすら歩いたあの旅では、自然の中でのあなたの明るい笑いが印象的でした。お互いの人生の中で、かくも長い間、時を同じくしてきた事を思えば、お別れはやはりさびしいものでございます。どうぞ時折あなたのふるさとの香りを伝えて下さい。新たなる旅立ちを心からお祈り致します。長い間の御厚情と御指導ほんとうにありがとうございました。



“弥生ヶ原にたたずみて”

友田幸子（地球物理学教室）

スカートの上までくるようなススキの原の島の分教場のような木造の2階の窓から、カッカカッカ、カッカカッカと手まわしの計算器を廻す音が辺りの静けさの中にひびいてくる。北に谷中の五重ノ塔、東に上野の東照宮、不忍ノ池の面さへも木の間にかいま見ることができた。

40年前の地球物理学教室の風情である。

野草のおいひのなかに、女性の香りが、フツとただようようになったのは、大戦も激しさが加わり、不足勝ちになってきた男手をおぎなううら若き乙女たちの香りであった。

★ ★ ★

地球物理と戦争との関りあいの一つは、パイロット達が、自分の位置をきめるのに必要な天文航法の計算であった。学徒動員で工場へ行くよりは大学での仕事の方が、と乞われるまゝにこの道を選び、坪井研究室の一員となった。部屋には才媛のIさんがおられた。兄君は、この教室の卒業生でもあり、「ソニー」の育ての親でもある。隣の部屋は新進気鋭の永田武助教授だった。

航法の仕事にはげむにつれ、星を覚え、星座を覚えた。時に、仕事は夜に及んだ。帰路の夜空は星座でいっぱいだった。「あれは何星、あれが何座……」と楽しく眺め、さんざめきなからの夜道であった。先生方には星の渾名^{あだ}がつけられた。地震のM先生はカノプス（寿老人）、海洋のH先生はホマルハウト（南魚）。坪井先生は何だったか……思い出せない。

◇ ◇ ◇

敗戦の色こくなつた頃、大学内は分散して疎開し、教室も信州岩村田へ移った。図書館が教室になり、皆、農家へ分宿した。そこで一体

何をしたのだろう。馴れない土地で生きるために必要な事ばかりに追われていたことしか覚えていない。

* * *

敗戦。そして平和！大学の周りの焼野ヶ原にも、少しづつ色がついてきた。けれども、大学内を歩く人たちの服はまだ黒かった。でも、目は輝いていた。

∴ ∴ ∴

地震があった。いくつも……。

即日、観測隊が出かけた。助手も学生も。

「金は何とかするから！」と先生方に励まされ、リュックに長グツ、着のみ着のまま、出られる者はすぐ出かけた。講座間のセクショナリズムもなかった。その諷爽とした後姿に乙女たちは手を振った。

☆ ☆ ☆

男女同権の世となった。大先生の講義を拝聴し、演習の仲間にも入れて頂くことができた。並んで歩く事さえ許されなかった時代から、日帰りならと車に同乗して観測に行く世にもなっていた。

。 。 。

大学人たちは、いつの間にか国家公務員となった。木々の緑を映し、石橋のかかっていた浅野邸内の池もよごれ、いつしかうめられてコートに変わった。木々は少しづつ町の人たちの燃料ときえ、野草生い、菜の花や桜の花がまぶしいように咲いていたこの弥生ヶ原も、コンクリートの建物でうめつくされた。そのなかから、かつての何倍かの人々のうめき声と、機器の音が聞える。

＊ ＊ ＊

浅野の屋敷跡から逢初口（現根津）に通じる坂の両側の松の植込は、いつの頃からか、ヒマラヤ杉と変わり、家老の家や麦畑のあとは、柱の細い大学の宿舎が建ちならんだ。

物思いにふける研究者か、学生か、うつ向いてトボトボと歩いている。角帽を被り、胸を張っていたキラキラした目の若人たちは、どこへ行ってしまったのだろう。

▽ ▽ ▽

過ぎてみれば40年の歳月はこんなにも短かった。若かりし人々も、同じように年を重ね、大方は教室を去った。長い間お世話になり励まして下さった坪井先生は、3年前、あとどうぞ御自由にとの仰せの如く、忽然と彼方へ逝かれてしまった。先生の御努力で伐採を免れた^い椎の木だけが、黙々と巨体を残している。長い長い物語を語りかけるように。

友田幸子技官をおくる

熊 沢 峰 夫

地球物理学の歴史の証人というのは、この人のことではないかと思う。友田さん（当時は井上さん。この名前を聞いてなつかしい人が大勢居るらしい）が地球物理学教室に勤務し始めたのが昭和18年であるから、若い方々には（もちろん、私にも）歴史上の人物やイベントと思えることに直接立合って、確かな目で見て来ているわけである。

科学を支え次世代に伝えていく“人間”とその歴史に私は関心があるので、定年後はそういうことを書いていただきたいと思っている。

私が大学院学生の頃、学会のリーダだった坪井忠二先生が、さすが坪井先生だ、と大方をうならせた講演のネタはほとんど友田さんが直接手がけたものだった。友田さんが明敏で行動的だからとは思いますが、坪井先生は友田さんを講義に出席させたりフランス語やロシア語の勉強をすすめたり、見守りながら相当むずかしい仕事を与えて育て、ということをしたようである。友田さんはそれに応えて、坪井研究室では立派な研究が次々行なわれ、学界の指導的な研究者を生み出して行った。友田さんが人知れず手がけた大きな仕事もたくさんある。例

えば、日本がまだ貧乏だった時代に国際学術誌 Journal of Physics of the Earth を発刊し、初期の一番困難な時代に編集や運営の実務に骨折ったのは友田さんだった。昨今の J P E 誌の財政事情が苦しいなどというのは、友田さんの目からは、正に目を覆うべき惨状であろう。坪井先生のような人格者が大学というところに居られたのは古き良き時代のことだったか。時移り人変って、豊かにはなったがひどく忙しい時代になってしまったようだ。友田さん^の在官の後半は、非常に楽しいというものではなかったかも知れない。でも最近外から赴任して来た私の仕事を大変誠実にやって下さった。この教室の40才以上の人で、まだ心理的抵抗感があり使い勝手の悪かったOA機器を一番最初に使いこなしたのは友田さんだったと思う。歴史の証人などと書いたから、御存知ない方は（理学部の新米かモグリのはずだが）大変なお婆さんを想像するかも知れないが、とんでもない。気分も行動も大変若い。ボーリング場やスケート場で、キャッキヤとはしゃいでいる若い娘にチョッカイをかけて失敗しないよう、若手の方々に警告しておく。

坪井先生の学問の後継者である海洋研究所の友田好文先生もこの3月定年退官される。御二人共趣味豊かで多才、今までのゆとりのない喧噪たる環境から逃れて自由で楽しい第二の人生

を楽しみにして居られるようである。長年月に亘る御骨折りと地球物理学教室の研究・教育への寄与に深く感謝しつつ、御多幸をお祈り申し上げる。

仲野喜美子さんを送る

佐藤良輔（地球物理学教室）

仲野さんは、終戦の年（昭和20年）の12月に地球物理学教室へ「雇を命し」来られた。月給金50円也だったそうである。何でも空襲で焼け出されて、同じ焼け出され組の永田武先生に「教室に来んか」と声をかけられ、当時の教室の「小使室」にお母さんと一緒に住んでおられたという話をうかがった。東京が焼野原だった頃の話である。

当時の地球物理学教室といっても、今ではお分りにならない方が多いだろうから一応説明しておく、場所は現在の大型計算機センターの辺りで、木造二階建一棟と平家一棟。あたりは草ぼうぼうで、現在のいわゆる「弥生キャンパス」には、隣りに同じ木造二階建の地震研究所2号館があったほかは何もなかったのである。教室の前の広場(?)で野球をすると、球探しの方に時間を費やすといった環境にあった。我々が大学に入学したときの教室主任訓示で、坪井忠二先生が「こんな建物でびっくりしたろうが、この中には地球物理学の世界最先端の頭脳が入っている」といわれたのを、どういうわけか今でも覚えている。

さて、今回、仲野さんが定年退職されるにあたり、何か書いて欲しいと広報委員会から依頼され、ムカシの事務室におられた仲野さんのことを何とか思い出そうとしたが、どうしても思い出せない。良く聞いてみると、仲野さんは体

をこわされて、昭和26年10月から2年間程療養生活を余儀なくされていたのだった。つまり、丁度私が学部学生を終る頃は療養中で教室にはおられなかったのである。当時の教室には、鼠もいたし、ムカデもいたし、ヤモリも頼みもしないのに壁にへばりついて教室を守っていてくれた。そして食糧は充分ではなかった。事務室は、今でも思い出すが、昼なお暗く、一日中電燈をつけていなければ仕事にならないような状態にあった。体をこわされたのも止むをえなかったといえよう。しかし幸いにも完治されて、その後は大病をされたことはない。

昔永田先生が「あの頃の喜美ちゃんはいかがだったよな」といわれたのを何度か聞いたことがある。仲野さんはその度にそれたような笑いを浮べていた。勤められてからもう40年。年毎に仕事の増えていく事務室で、「古き良き昔」のことを憶いながら、恐らくは、いろいろと不満をもたれたこともあったことであろう。しかし私は、仲野さんが不満をいうのをとうとう耳にしたことがなかったし、頼んだ仕事は何時も気持良くやって頂いたという記憶だけしか残っていない。

仲野さん長い間ご苦労様でした。これからも何時までもお元気で。

今井 勲さん

近 藤 保 (化学教室)

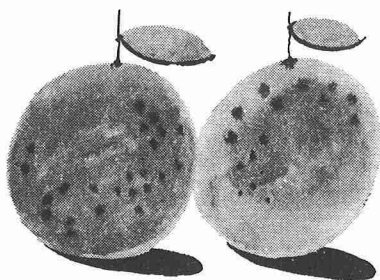
日立製作所中央技術研究所(日立中研)に居られた今井さんに初めてお会いしたのは、7年以上も前のことになる。そのころ、化学教室の金工室には松田正太郎さんという方が在任しておられ、定年が間近であったので、後任を捜す必要があった。何かの事情で私がおその任を引き受けることになり、出来るだけ優秀な人をということでもかなり広範囲にわたって心当りを捜したが、適当な人がなかなか見つからなかった。このような事態はある程度予想はしていたものの、優秀な技術者を捜すことがいかに大変であるかを思い知らされた。民間企業では技術の優劣がおその企業の死命を制するという認識のもとに、技術者を育てて高給をもって遇している。一方、官公庁ではこのような技術者が必ずしも優遇されてはいないので、待遇面でも民間との落差が非常に大きい。幸いにも、当時理学部長であった田丸謙二先生の御尽力で、当時工学部長であった千々岩先生を介して、日立中研の今井さんを紹介して頂いた。日立の人事教育部の方と一緒に日立中研で秘かに今井さんとお会いした。その後いろいろな経緯があったが、今井さんは文部技官(53年9月31日付)になられ、化学教室の金工室で仕事をして下さることになった。

今井さんの技術は非常に優れており、日立製作所で技能オリンピック選手の指導教官を4年間つとめられた。また、国家検定機械技能士一級の資格を持っておられる。このような方を化学教室の金工室にお迎えできたことは、われわれにとって大変有難いことであった。昔の化学教室には、ガラス細工の装置が多かったが、最近の化学、とくに物理化学の研究では、大きな真空装置など金属工作を必要とする部分が極めて多い。今井さんがかなり精度の高い装置や、高度な技術を要する器

具を作って下さったお蔭で、われわれの研究は大いに発展し、その装置がなければ思いもよらなかったような成果もたくさん得られた。

われわれ研究者が新しい実験を計画し、装置を手探りで試作する過程では、実際に工作する人と緊密に連係しながら進めてゆく必要がある。今井さんは日立中研で多くの研究者と長年そのような経験を積んで来られたので、その点でも理学部の技官として最適の人であった。また今井さんの几帳面な性格を反映して、金工室は常に整理整頓され、仕事が非常に能率的であるには大変感心させられた。

今井さんが化学教室で過ぎられたのは、わずかに7年という短い時期であったが、われわれが受けた恩恵はこのように極めて大きかった。義理堅く、さっぱりした人柄なので、今井さんのファンも多かったのではないかと思う。ここに今井さんのお仕事に敬意を表すとともに、いろいろとお世話になったことに心から感謝している。



植 物 園 の 35 年

大 塚 靖 夫 (植物園)

早いもので、もう35年も歳月が経過してしまいました。ついこの間植物園に就職したような錯覚をおこします。私の就職した当時の世情は、戦後の復興の最中で食糧難時代の末期でしょうか、昼食はコッペパンにジャム・マーガリンなどをつけたものでした。私よりすこし前に就職した人の話ではコッペパンだけだったという話ですから、まだいくらかは良くなっていたのでしょう。食糧だけでなく植物園は人手も資材も不十分で、下刈りを行わない山林を散策するのと同じ、一部では人が草に埋って周囲からはまったく見えない処があったくらいです。農学部からトラクターを借りて開墾したり、冬枯れの頃には野焼もしました。コジュケイも沢山住みついていて、草刈りの時などにその小形な卵を拾ったものです。今では草が人を隠してしまうような場所こそありませんが、人手や経費が不十分で刈取りが出来ない処が相当の面積に達しているのは気がかりなことです。塀を越えてち

ん入する猫と捨て猫が横行してコジュケイはすでに絶えてしまったと思われています。

以前鎌を使った手で芝刈機を運転、また藁で囲った霜除けが新製品に変わりました。植物園に期待されるものは時代によって少しずつ変わりますが、人手も資材も足りないことは大学植物園の宿命のようなものでしょうか。これからはもっと実のある立派な「大学の研究植物園」に発展するように期待しています。

さて我ままな私も無事定年を迎えることが出来ましたこと、事務的にも、実務的にも多くの先輩及現在お勤めの理学部内外の皆様の御支援と御べんたつたまものです。この紙面をお借りして御礼申し上げる次第です。

長い間いろいろと御世話になり有難うございました。今後も何かと御世話になることがあるかと思えます。その節はよろしく御援助頂けるようお願い申し上げます。最後に皆様の御健康をお祈りして拙文を終りたいと思えます。

大塚靖夫技官（植物園）の退官によせて

甲 斐 正 人 (植物園)

植物園の大塚靖夫育成部主任は、昭和61年3月末をもって定年退官されることになりました。大塚さんは理学部植物園に奉職されて以来、今日までの36年余、植物の育成管理に当られ、また、昭和54年10月以後は植物園育成部主任として、全体をよくまとめられ、今日まで非常に精力的に仕事をされ、植物園のために盡力してこられました。

一口に36年と申しましても、だれにでもできることでなく、そのご努力に対してここに改めて感謝すると共に、その間、幾多の困難にも遭遇され、辛い思いをされたことも多かったと思いますが、それらをよく克服され無事に定年を迎えられる今、感無量なるものがあるかと思えます。戦後の混乱のなか、施設も資材も不足の時代、いち早く植物園の復興に立ち上げられ

懸命に努力されたことは、ときに話題に出ていることをよく記憶しています。なかでも大塚さんは温室部門を担当され、温室の復興にはその中心的役割を担われ、今日の姿にまでもってこられたのは特筆すべきことかと思えます。しかし、この道のりは決して平坦でなく、経費も人手も不足の中で、今話題になっている重要な植物の系統保存に貢献してこられたのは、常日頃の堅実な努力の結果だと思えます。また、長い経験を生かしての温室植物の栽培技術にも秀いでおられ、とくに野生のラン科植物の育成は得意のようで、よく熟知されていたようです。育成部の主任を引き受けられてからは、相次ぐ人員の削減や経費の節減により、主任としての立場を十二分に生かしきれなかったことは心残りの点かと思えます。また、諸々の点で私など

とも意見の異なる局面もあり、妥協をよしとしない大塚さんのやり方に当惑を覚えたこともありますが、これも大塚さんの実直な人柄によるものだと、今ではそれらの一つひとつが懐かしく思い出されます。

趣味の方は相撲がすきで、その方面ではかなりの通のように見受けられました。そのほか、折りにふれての話の中にも多方面に造詣の深いことがうかがわれました。

植物園の役割もこれまで以上に重くなりますが、諸先輩に教えられたことを十分に生かしながら、私共も精一杯頑張りたいと思っています。大塚さんはまだまだ若く、今退職されるのは本当に残念です。今後ますますのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ筆を置きます。

石 渡 丈 夫 さ ん

橋 本 勝 眞 (中央事務)

石渡さんは、昭和60年3月植物園から中央事務室に配置換になりましたが、そのきっかけはメールシステム新設のためと聞いております。良い人を得たものです。

初めての職務と新しい環境の中で苦労されたと思いますが与えられた職務に黙々と精励され郵便物が各教室に一刻も早く届くよう努力されました。昨年8月、各教室の差出し郵便物の回収を始めたときも自からメールボックスの扉を取り換えるなど積極的に動いてくれました。「自分の仕事だから」石渡さんの口から出る言葉である。

石渡さんの目の大きな温顔から受ける印象は、優しい親父という感じである。東京生れの東京育ちであるが、それにしては失礼な言い方かもしれませんが、あまり小回りのきく人柄ではな

いように思います。しかし、自分や周囲の人を大切にする人である。その点に私は共感をおぼえるのです。特に趣味らしいものはお持ちではないとのことですがスポーツ型の自転車を乗り回している程お元気である。仕事を終えて家に帰り水割りを飲むのが楽しみの一つであると話してくれました。これが石渡さんにとって心身ともに健康である理由かもしれません。

昭和18年、石渡さんは愛国の心情一途に海軍へ志願しました。横須賀海兵団の機関兵として軍務に服され、終戦は小笠原の父島で迎えたとのこと。昭和21年2月、多くを語りませんが言葉の端々から九死に一生を得て復員されたことが推測されます。終戦で一度死んだと思っていますと淡々と語る言葉に私には想像もできない戦争に対する深い想いが感じられるのです。

石渡さんは復員後、二、三の民間会社に就職されましたが昭和35年2月に植物園の警備員として採用され、昭和47年7月に自動車運転手に勤務換となり、中央事務室に移られるまで25年あまり植物園に勤務されました。

本年3月末をもって退職することになります。がメールシステムが一応軌道にのりこれからというときに去られることは大変残念です。この仕事は、石渡さんの双肩にかかっていたといっても過言ではないです。し、地味ですが大切な仕

事ですのでもう少し続けて欲しいと願うものです。しかし、これも致し方ないことです。

さて先輩である石渡さんの経歴、人となりについて紹介いたしました。私の主観による部分もありもしこの拙文により迷惑をおかけするとなれば、まったく私の責任でありお詫びする次第です。

最後に石渡さんの今後のご健康とお幸せをお祈りするとともに大変お世話になりましたことに対し、深くお礼申し上げます。

《 学部消息 》

理学部長と理職の交渉

理学部長と理職（理学部職員組合）の交渉は、昭和60年11月18日、12月16日、61年1月20日、2月17日に行なわれた。主な内容は以下のとおりである。

1. 職員の待遇改善について

理職は、10月1日付で技術職員1名が5等級に昇格したこと、1月に教務職員1名が助手に振替えられたことに対し、当局の努力に敬意を表し、更に、今後の努力を求めた。

2. 昇格について

行(ニ)2名の昇格を要求した。学部長は、該当数室からも要請があり、内容を検討のし手続きを始めたい旨述べた。

3. 俸給表の改訂について

理職は新設級への格付状況とその基準について尋ねた。学部長は「理学部で技官が行(一)5級に13名、行(ニ)4級に2名格付された。基準は提示されていないが、分れば明らかにしたい。」と答えた。

4. 技術職員の専門行政職俸給表への移行について

理職は基本的要求に沿った移行の実現を要求した。学部長は「文部省の試案はいろいろの問題点を含んでいると思われる。またこのことは全国理化学部長会議を通じて、国大協等に対し技術職員の真の処遇改善制度になるよう要望するとともに専門行政職俸給表適用が早急に実現するよう努力している。」と述べた。

5. 技術職員の研修について

理職は研究会参加の旅費等、技術職員の研修への援助を要求した。学部長は「研修は技術の向上にとって不可欠であり、可能な範囲で措置をとりたい。」と答えた。

その他、行(ニ)から行(一)への振り替え、定員外職員の定員化、3月定年退職者の勤務延長等について話し合い、学部長は引き続き努力すると述べた。

教授会メモ

60年12月18日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 教務委員会報告
(5) 企画委員会報告
(6) その他

61年1月22日（水）定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 東京大学理学部附属分光化学センター
規程の一部改正について
(4) 入試制度に関する国立大学協会のアン
ケートについて
(5) 教務委員会報告
(6) その他

東京大学総合研究資料館主催

第32回講演会のお知らせ

このたび総合研究資料館では、下記により講演会を開催致します。聴講ご希望の方は、直接会場へおいでくださるようご案内します。

記

1. 総合研究資料館主催第32回講演会

講演者 荒牧重雄氏（東京大学地震研究所教授）

演題 「火山の噴火と災害」

2. 日時 昭和61年4月19日（土）午後2時～4時

3. 入場 無料

4. 場所 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学総合研究資料館講義室（赤門脇）

☎ 03(812)2111 内線2802

理学博士の学位授与者

〔昭和60年11月25日付（4名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	松野 健	回転場における温排水の振無に関する数値的研究
同	中村 晃三	暖かい海上における気団変質過程の数値的研究
同	三井田 陸郎	アルミニウムに富む Al - Ti 合金の一次元逆位相構造
同	逸見 千代子	ゲーレン石後退変質の水熱実験的研究

〔昭和60年12月23日付（2名）〕

論文博士	齊藤 享治	日本の扇状地における動的平衡説と気候関与説の検討
地質学	金川 久一	北上山地における白亜紀初期のへき開形成を伴う変形に与えた花コウ岩貫入の影響

人事異動

（講師以上）

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
化学	講師	守 隆夫	60.12.1	昇任	助手から (外国人留学生担当)
動物	教授	嶋 昭 紘	60.12.16	昇任	助教授から
物理	教授	堀 田 凱 樹	61.1.16	昇任	助教授から
化学	教授	岩 沢 康 裕	61.1.16	昇任	助教授から
化学	教授	不 破 敬一郎	61.1.25	転任	環境庁公害研究所副所長
化学	教授	不 破 敬一郎	61.1.25	併任	61.3.31まで

（助手）

中間子	助手	久野 良孝	60.12.1	休職	
中間子	助手	門野 良典	60.12.1	採用	
植物	助手	網野 真一	60.12.1	採用	
天文	助手	桜井 隆	61.1.1	配置換	東京天文台へ
数学	助手	矢野 公一	61.1.1	昇任	九大理助教授

所属	官職	氏名	発今年月日	異動内容	備考
数学	助手	桐村 康子	61. 1. 1	昇任	教務職員から
地質	助手	金川 久一	61. 1. 16	採用	
物理	助手	白木原 康雄	61. 1. 7	復職	

(職員)

物理	事務官	川口 江理子	60.12. 5	辞職	
生化	事務官	藤田 帝子	60.12.16	採用	
事務	事務長補佐	神戸 和雄	60.12. 1	死亡	
事務	大学院掛主任	伊藤 邦範	60.12. 1	昇任	医学部教務掛長へ
事務	大学院掛主任	鴻地 優	60.12. 1	昇任	教養学部より
生化	技官	菊地 昌子	61. 1. 1	配置換	工学部へ

外国人客員研究員報告

所属	受け入れ 教官	国籍	氏名	現職	研究期間	備考
地物	小嶋 教授	イタリア	Magro Gabriella	ナショナルリサーチカウンシル 助手	60.11.11 ~ 60.12.21	ナショナルリサーチ カウンシル
情報	国井 教授	連合王国	Geoff Wivill	カルガリー大学 教授	60.12. 1 ~ 61.1.31	ニュージージー ド政府
情報	国井 教授	ポーランド	Ryszard SZABLEWSKI	シチューシン大 学 マネージャ ー	61. 4. 1 ~ 62. 3.31	JSPS
地物	松野 教授	アメリカ 合衆国	Tsutomu TAKAHASHI	ハワイ大学 教授	61. 1. 1 ~ 61. 6.30	JSPS
地質	久城 教授	アメリカ 合衆国	James B. Gill	カリフォルニア 大学 教授	60.11. 1 ~ 61. 7.31	ナショナルリサーチ ファンデーション
天文	海野 教授	中華人民 共和国	熊 大 閏	柴金山天文台 準教授	61. 2.24 ~ 61. 3.29	日中科学技術交 流協会
天文	尾崎 教授	ドイツ連 邦共和国	W. J. Duschi	欧州宇宙機関 研究員	61. 4.12 ~ 61. 5.11	E S A (欧州宇宙機関)
地物研	玉尾 教授	アメリカ 合衆国	Lou C. Lee	アラスカ大学 地球物理研究所 準教授	61. 2.21 ~ 61. 3.25	東レ科学振興会
中間子	永嶺 助教授	カナダ	C.D.P. Levy	TRIUMF 研究 所 助手	61. 2. 1 ~ 61. 2.28	ブリティッシュ コロンビア大学 高エネ研 東大 中間子

編 集 後 記

3月はお別れの季節です。今回は、理学部を去られる方、それを送る方、合わせて20人余りの方に原稿をお寄せいただきました。それぞれの感慨を盛ったエッセイを多数いただき、読みごたえのある号になりました。

これをもって編集担当も交代いたします。この1年の間にご寄稿下さった方、表紙の写真を提供して下さった方、ご協力下さった事務の方に感謝いたします。

(松野)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4 3 5 9
田賀井 篤 平 (鉱物)		4 5 4 4
高 橋 正 征 (植物)		4 4 7 4
矢 崎 絃 一 (物理)		4 1 2 3
松 野 太 郎 (地物)		4 2 9 4
